祝祭都市ヴェネチアの生きる道

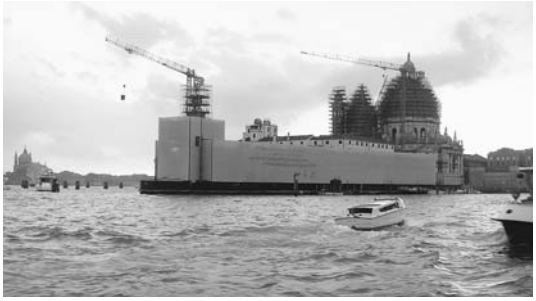
@Venezia

9月5日から14日まで、ヴェネチアに滞在した。この街を訪れたのが何度目なのか、正確にわからなくなっているが、危うくサンマルコ広場に一度も立ち寄らなくなるところだったのは初めてである。今回はヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展2008の日本館コミッショナーを担当し、アルセナーレの近くのアパートと、メイン会場のジャルディーニを往復する毎日だったからだ。

美術展と建築展を通じて、いずれもヴェネチア側が場所を提供し、毎年各国が自前の資金を用意して、パヴィリオンに作品を設置する。しかも会場に入りきれない国は、街のあちこちに場所を借りて、同時期に展示を行なう。つまり、海外からは持ちだしでも参加したいという状況がある。

もちろん、観光収入の方が圧倒的に多いだろうが、文化的な聖地としての価値を持つことで、外部資金導入のシステムもうまく稼働していることに改めて感心させられた。巨大な都市だとイベントが埋もれてしまうから、世界的な知名度がある手頃なサイズの個性的な街だからこそ、ちょうどいい。

ヴェネチアは、ふだんから祝祭的な雰囲気を持つ。古建築が多く、車が通らない水の街であること。言葉で要約すれば、それだけなのだが、世界各地からの訪問者にとっては、テーマパークのような非日常的な空間を感じてしまう。



ヴェネチアのプンタ・デラ・ドガーナ。内部を美術館に改造するための工事が進行中　写真提供：筆者

滞在中、プンタ・デラ・ドガーナの現場を見学した。15世紀にさかのぼる古い税関を美術館に改造するプロジェクトである。これは海を挟んでサンマルコ広場のはす向かい、またはサンタ・マリア・デッラ・サルーテ教会の隣にあって、設計者の安藤忠雄の名前が仮囲いの上に掲げられていた。内部には安藤スタイルのコンクリートの壁が挿入され、アートスペースがつくられる。

興味深いのは、ヴェネチアがフランスの実業家フランソワ・ピノーのコレクションのための美術館の建設を許可する代わりに、税関の修復工事などの資金を出させていること。一応、40年の期間限定だが、更新される可能性も高いだろう。つまり、一等地を提供する代わりに、市がお金をかけずに建物の保存工事が行なわれる。先だって、パラッツォ・グラッシも、外観はほとんど変わることなく、安藤のデザインにより、内部がピノーの美術館に改造されていた。

プンタ・デラ・ドガーナは、来年のビエンナーレ国際美術展が始まる2009年の6月にあわせて、オープンするという。

をちこち散歩
五十嵐太郎
いがらし たろう
建築史家
東北大学准教授